

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

総じて日本人は「あれか、これか」と決めつけるのを好まない。「自由」についても同様で、日本人は柔軟に対処する。

要するに、西洋的自由とは桎梏^A(しつこく)としての因果的必然性からの逃走であり、究極的には「必然性からの自由」は内面的モラルに合致する「自由なる必然性」に高まるべきものとされる。これに比べると、日本の自由には非常に興味深い事実が観察される。偶然性と必然性が自由において統一されて渾然一体^B(こんぜんいつたい)となるのだ。

日本の自由を考えるためにはまず語義の確認・整理が必要である。というのもここで問題になる「自由」と「自然」という二語には、明治以後の翻訳語としての新しい意味と伝統的な意味とのあいだに大きな懸隔^Cが見られるからだ。しかし、この前提作業の遂行自体が日本の自由の輪郭^Dを描き出してくれることになるはずだ。

「自由」は中国で古くから使われていた語で字義どおり「自らに由^Eる」という意味で、自主的、独立的ありようを指している(もつとも勝手気ままなという否定的な意味合いもあるけれども)。初期仏典の漢訳では解脱^Fの自由な境地の意味で使われたこともあるが、しだいに「自在」に取って代わられるようになった。しかし禅の文献ではそのまま、束縛のない境地を意味するものとして使われつづけた。いずれにしても個人の心の境位を表し、欧米語のような政治的・社会的な意味合いを込めて使われることはついぞなかった。この東洋的な「自由」の概念は西洋のそれとずいぶん違っている。この違いを鈴木大拙は次のように説明している。

西洋のリバティやフリーダムには、自由の義はなくて、消極性をもった束縛または牽制^Gから解放せられるの義だけである。それは否定性をもっていて、東洋的自由の義と大いに相違する。

「……」自由には元来政治的意義は少しもない。天然自然の原理そのものが、他から何らの指図もなく、制裁もなく、自ら出るままの働き、これを自由というのである。(『東洋的な見方』)

前段については補足説明が必要だろう。鈴木はリバイとフリーダムを一つに括^{くく}ってしまつたが、厳密に言えば違いはある（もつとも無視しても大過はない。事実、この二語はふつう厳密に使い分けはされていない）。フリーダムは束縛や拘束がない、義務を免除された状態（しなくてもよい）を、リバイは行動や発言の権利が保障された状態（してもよい）をそれぞれ意味する。政治的なニュアンスを問題にしなければこの二つの自由は、「消極的自由（くからの自由）」と「積極的自由（くへの自由）」と重なることができる。しかしいずれにしても、西洋的自由が「くから」であれ「くへ」であれ、「必然的なもの」に制約されていることに変わりはない。「他から何らの指図もなく、制裁もなく、自ら出るままの働き」である東洋的自由に比較すれば、西洋的自由は不自由である。東洋的自由は必然性も偶然性も超越した自在的・自立的な境位にほかならない。本当をいえば、リバイやフリーダムを訳すのに仏教用語の「自由」をあてるのは問題だったのだ。

問題といえば「自然」も本来の意味と翻訳語でずいぶんと開きがある。元の意味はいま見た「自由」と非常に近いものとして受け取られていた。老^ロ荘の「無為自然」という言葉からも分かるように、「自然」は「おのずからしかあること」、つまり「自然さ」の意味で使われていた。しかし「自然」は伝統的には名詞で使われることは少なく、「自然に」「自然な」という形で使われ「おのづから」という意味を表していた。ただし「ジネン」と読むと必然性が強調されるという使い分けもあったらしい。いずれにしても「自然」は nature の訳語としてわれわれが慣れ親しんでいる「天地・万物」という意味とはだいぶかけ離れている。この点について九鬼周造が『偶然性の問題』のなかで「おのづから」「みづから」「じねん（自然）」の語義を踏まえて問題にしている。

九鬼によれば、日本語では因果的偶然は「おのづから」「みづから」「じねん（自然）」の三語によつて表現されるが、「おのづから」が基本的である。「おのづから」（非決定的自発性）の積極面（自由）を「みづから」が受けもち、消極面（自然）のおのづからそうあることを「じねん」が受けもっている。「みづから」（自由）と「じねん」（自然）は正反対の関係に立つ。ただ、九鬼は日本（東洋）ではこの三者の関係がきつちりと対立しているわけではなく融通無碍^E（ゆうずうむげ）であることに日本的性格を見ている。

東洋の思想にあつては自由と自然とは乖離^{かいり}的対立をしないで融合相即^オして見られる傾向がイチジル^オしい。「みづから」の有^もつ

目的必然性と「じねんに」の有つ因果的必然性とは「おのづから」なる自発性に止揚^カされた段階と見ることが出来るかも知れぬ。(『偶然性の問題』)

この興味深い論点を『偶然性の問題』ではその場ではないと切り上げてしまったが、後年に書かれた論文「日本の性格」では次のように膨らませている。

日本の道徳の理想にはおのづから自然といふことが大きい意味を有つてゐる。殊更らしいことを嫌つておのづからなところを尊ぶのである。自然なところまで行かなければ道徳が完成したとは見られない。その点が西洋とはかなり違つてゐる。いつたい西洋の觀念形態では自然と自由とは屢々^{しばしば}対立して考へられてゐる。それに反して日本の実践体験では自然と自由とが融合相即^キしてエトク^キされる傾向がある。自然におのづから^{ほとぼし}逆^{ほとぼし}り出るものが自由である。自由とは窮屈なさかしら^Fの結果として生ずるものではない。天地の心のままにおのづから出て来たものが自由である。自由の「自」は自然の「自」と同じ「自」である。「みづから」の「身」も「おのづから」の「己」^{おのれ}もともに自己としての自然である。自由と自然とが峻別^{しゅんべつ}されず、道徳の領野が生の地平と理念的に同一視されるのが日本の道徳の特色である。

西洋では偶然の必然化に自由の極地を見るが、日本では偶然と必然の融合相即に自由の極地を見る。西洋では偶然と必然はまったく別のカテゴリー^Gに属するが、日本では偶然と必然は截然^H(せつぜん)と区別されてはいない。偶然に対する拒否か許容かというスタンスの違いが自由をめぐる彼我の違いを産み出したわけである。

日本的な自由の概念がもつ「自由さ」は注目値する。

この自然を貴ぶ自由さは「日本の道徳の特色」であるばかりでなくて、芸術の特色でもある。ある対象を与えられたもの(自然)と見るか、作られたもの(作品)と見るかによって、くだん^Iの対象の意味(価値)は大きく変わってくる。問題になってくるのは「自然(無為)／作品(人為)」の二項対立的図式である。西洋的な自由観と日本的な自由観の違いは美的対象を前にしたときの

スタンスによく示されている。西洋人は自然と人為をはつきり区別し対立的に捉えるが、日本人は必ずしもそうではない。日本人は「自ずからしかあるもの」を好ましいと考えるが、西洋人はそうではない。「しかあるべきもの」をよしと考え、それを「自ずからしかあるもの」に押しつけようとする。そこに見られるのは自然の人工化^ク＝人為化である。自由な偶然性を排除し、様式化された必然性に変えることである。日本人は自然の自然らしさに自由を感じ、ヨーロッパ人は自然の人間らしさに自由を感じ取る。

いま述べた経緯を西洋と日本の作庭術で検証してみよう。

日本の庭園は「風景式庭園」で自然にならない、自然からモチーフを得るとというのが基本原理である。言い換えれば自然の風景の縮小化であり、象徴化である。平安時代に書かれた日本最古の造園書『作庭記』に「乞はんに従う」という言葉が読める。この言葉に端的に示されているように日本の作庭術は自然の地形や岩石をなるべく活かそうとする。造園家は自然が人間に要求してくるものに耳を傾けて、自然に従いながら庭を造る。そこにはすでに確認した日本人に独特の自然観がトウエイ^ケされている。自然と人間は敵対^リしあうものではなくて、人間は大いなる自然に従容^リと従いその懐のなかに飛び込み、いだかれて一体となることこそが肝要なのである。「枯山水」「借景」「回遊式庭園」など日本独特の作庭法はすべて「自然の乞はんに従う」ことを旨としている。

こうした自然を活かす日本的作庭術と好対照をなすのが西洋の造園法であろう。噴水や彫像が配された寓意^{ぐうい}とシンボルに満ちた人工的な閉ざされた空間としての庭園。ヨーロッパ的庭園の極致がル・ノートルのデザインになるベルサイユ宮殿の庭園である。

ベルサイユの庭園においては自然はまずばらばらに解体され、ついである意図(イデー^の＝アイデア)のもとに再構成される。作者ル・ノートルはおのれの抱懐^{しゅう}するプランに則^のって強い軸線、左右対称性、トウシ^ウ図法など幾何学的構図を引き、そして人工的に刈り込まれた植木、立像、刺繍^{ししゅう}花壇、大噴水、水路などを整然と配置する。それはまさに造園家のデッサン(比例とシンメトリー)に基づく自然の解体・変形である。そこに見いだされるのは理性の秩序(必然性)におきえられた人工的自然(建築的閉鎖空間)にほかならない。

この庭園の人工的造形性はキョウレツ^サな秩序への意志を表現している。この広大な庭園のすべては一点に収斂^ク(しゅうれん)する。そこはベルサイユ宮殿中央の「鏡の間」のテラスである。このバルコニーの高みから見下ろせば――マクロの視点に立てば――

―、大庭園は厳密な左右対称的幾何学図形を繰り広げる。さながら王者に忠誠を誓う兵士たちの閱兵式^シのように。ここに自然は人間の強固な意志に従わせられ、幾何学的理性的秩序に填め込まれることになる。

この幾何学的構図への好みはヨーロッパ人の美意識が対称性に基礎をおいていることから来る。ワクセイ^スの楕円軌道^{だえん}の発見を遅らせた元凶が完全図形である「円」へのこだわりであったことはよく知られている。ところが日本人は「対称的」図形に固さ(野暮)を見る。自然(粋)でないと感じる。そしてわざと「対称性」を破る。

対称性(必然性)の堅苦しさに変化(偶然性)を与える。茶道の世界では「ゆがんだ」茶碗をそのゆがみ故に珍重するということがある。もともとは偶然がもたらした出来損ないのはずであったが、その予期せぬ「造化の妙」を喜んで、後には意図的に「ゆがみ」を演出した。必然性の一樣さを破る偶然性の「ゆらぎ」(遊び)を楽しむのである。ここには「偶然性の美学^ン」と称して差しつかえないものがある。ここで重要なのはちよつとズレているということだ。大きくズレていれば、あるいは不格好であり、あるいはグロテスクであり、あるいは下品であるだろう。規範性・様式性(必然性)からちよつと外れているからいいのである。「ちよつと」という条件が「偶然性の美学」の要諦である。

(野内良三『偶然を生きる思想』より)

問一 「桎梏^A(しつこく)」の意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 1

- 1 抑止 2 束縛 3 迫害 4 規律 5 運命 6 解放

問二 「渾然一体(こんぜんいつたい)」の類義語として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

2

- 1 万物斉同 2 玉石混交 3 付和雷同 4 吳越同舟 5 相即不離 6 純一無雜

問三

- 「ついぞ」^cの言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。
- 1 一度も 2 つとに 3 何度も 4 まるで 5 やがて 6 たしかに

3

問四

- 「老荘」^dとあるが、「老荘」の説明として**適当でないもの**を次の中から一つ選べ。
- 1 性善説を唱える学説 2 中国の伝統的な学派
- 3 道家の影響を受けた教え 4 処世のあり方を唱える思想
- 5 諸子百家に数えられる思想家 6 中国戦国時代に活躍したとされる人名の並称

4

問五

- 「融通無碍（ゆううずうむげ）」^eの対義語として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。
- 1 杓子定規 2 虎視眈々 たんたん 3 唯我独尊 4 傍若無人 5 疑心暗鬼 6 謹厳実直

5

問六

- 「さかしら」^fの意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。
- 1 忍耐 2 呪縛 3 思索 4 陳述 5 半可通 6 屁理屈

6

問七

- 「カテゴリー」^gの意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。
- 1 用法 2 身分 3 集団 4 語義 5 論理 6 範疇 ちゅう

7

問八

- 「截然（せつぜん）」^hの言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。
- 1 たしかに 2 ありありと 3 いんげんと
- 4 おぼろげに 5 ばくぜんと 6 はつきりと

8

問九

- 「くだんの」^Iの言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。
- 1 あなたの 2 いつもの 3 目の前の 4 先に述べた 5 はじめての 6 これから触れる

9

問十

- 「従容」^Jの意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。
- 1 容受 2 従順 3 悠揚 4 温容 5 敬讓 6 黙従

10

問十一

- 「収斂（しゅうれん）」^Kするの言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。
- 1 からまる 2 しずまる 3 まとまる 4 むらがる 5 せいりする 6 とりいれる

11

問十二

- 「さながら」^Lの言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。
- 1 すべて 2 あたかも 3 けれども 4 しつかり 5 そのまま 6 とはいえ

12

問十三

- 「軌道」^Mとあるが、「軌」を含むことばを次の中から一つ選べ。
- 1 きみがわるい 2 きぼうをいなく 3 きをいつにする

13

- 4 きかいてきにはたらく 5 パソコンをきどうする 6 よきせぬできことがおこる

問十四

- 「要諦」^Nの意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。
- 1 肝心 2 志向 3 制約 4 極致 5 奥義 6 塩梅

14

問十五

本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。

15

15

- 1 「風景式庭園」は天地・万物を作品として捉える庭園である。
- 2 「風景式庭園」は自然の自然らしさに自由を感じる庭園である。
- 3 「風景式庭園」は植木、立像、刺繍花壇、大噴水、水路などを整然と配し、風景を人工的に作り出す庭園である。

- 4 東洋的自由は自然との乖離的対立がない。
- 5 東洋的自由は美的対象のもつ偶然性を様式化された必然性に変える。
- 6 東洋的自由は意図的な「ゆがみ」をグロテスクで下品なものとする。

問十六 「懸隔」・「輪郭」・「解脱」・「止揚」・「閱兵式」・「珍重」の読みをひらがなでしるせ。

問十七 「イチジルしい」・「エトク」・「トウエイ」・「トウシ」・「キョウレツ」・「ワクセイ」を漢字でしるせ。

問十八 「自然の人工化」・「人為化」とあるが、それと同じ内容を示す語句を文中よりそのまま抜き出してしるせ（八字）。

問十九 日本の芸術において、自然を活かすことから生まれる偶然の産物を、筆者はどのように捉えているか。それを示している語句を文中よりそのまま抜き出してしるせ（十字）。

問二十 「西洋的自由は不自由である」とあるが、筆者はなぜそう考えているか。文中の語句を用いて説明せよ（六十字以内）。

問二十一 「偶然性の美学」とあるが、それはどのようなものか。文中の語句を用いて説明せよ（六十字以内）。

国語

解答例

問	解答
問一	②
問二	⑤
問三	①
問四	①
問五	①
問六	⑤
問七	⑥
問八	⑥
問九	④
問十	③
問十一	③
問十二	②
問十三	③
問十四	①
問十五	②
	④

問		解答
問十六	ア	けんかく
	イ	りんかく
	ウ	げだつ
	カ	しょう
	シ	えっぺいしき
	セ	ちんちょう
問十七	オ	著 しい
	キ	会得
	ケ	投影
	コ	透視
	サ	強烈
	ス	惑星
問十八		自然の解体・変形
問十九		予期せぬ「造化の妙」
問二十		西洋的自由には必然性からの解放という政治的意味合いがあるため、必然性も偶然性も超越した自在的な境位にはなり得ないから
問二十一		必然性の一様さに固さを見、一様さから少しだけ外れた偶然性のゆらぎに自然を感じ、意図的にゆらぎを生み出して楽しむ美意識